
魔法と剣のある異世界物語

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と剣のある異世界物語

【Nコード】

N7255Y

【作者名】

リン

【あらすじ】

平成の世、すべての武を極めし齡17の青年がいた。彼はあらゆる達人を凌ぐ武の才を持っている、幼い頃から武に関わり、そして極めてきたその力を学校の同級生は知らない。学校では怠け者と呼ばれている彼がある日、いわくつきの廃墟へ男一人と女二人の計4人で肝試しをすることとなった。そこで彼らは異世界へと迷いこみ、様々な敵と、仲間と出会い生きていく物語。

プロローグ

夕暮れの傾く空の下、 齡17の青年は眠気を誘う表情と茶色の学生服を

着こなし、片手に皮鞆を背負って町外れの川沿いを一人歩いていた。

周囲には人気はない、この時間帯この場所は街灯もなく人の通りが少ないため、何より薄気味の悪い一軒家があるから、街の人々はあまり近づこうとしない。

この道をこの時間に利用するのはおそらく自分くらいだろう。そう自覚している。

青年 - - 龍翠・翠真は川のほとりにある古ぼけた一軒家の前に立つと

眺めるようにしてそれを見据えた。

古ぼけた一軒家には昔から奇妙な噂がある。夜の12時に一人で家の中に入り

風呂場で『カルガギ』と意味ありげな言葉を口にすると、風呂場の中に吸い込まれて

異次元に飛ばされる、とか、深夜の2時に家の中に入って『ザルカベシソ』捕まえた

とか言えば、家の座敷の下から『ザルカベシソ』という異形な者が現れて異世界へ

呼んだものを連れ去るとか、どれもこれも異次元や異世界などこの世界とは別の空間

へ連れていってしまうような話ばかり、その噂の元となったのが

この家の住人の

失踪事件だ、翠真も幼い頃新聞などで読んだことがある。

それは13年前、夜の12〜4時にかけて一家3人が行方不明になった事件だ。

失踪原因は不明、今もその家族は見つかっておらず煙のように消えたのだ。

しかし、行方不明だけだとこれほどまでに噂は広がらない。噂の広まりを加速させたのは

次女や長女の部屋から見つかった、薄い赤に塗りつぶされた手紙と人形だった。

手紙にはカルガギ、人形にはザルカベシソと血字で書かれていたいう。

当時、それは黒魔術の一種では、という意見も上がったようだが、この世界に

魔法など非科学的なモノは存在しないはずだ。

実際翠真自身多くの人を見てきたが魔法など使う人間はいなかった。

しかし、それは自分が知るかぎりの話、もしかすると黒魔術は実在し

表の世には知られぬように極秘裏に行われているのかも、

幽霊や魂といった科学では証明しようのない存在はこの世界に五万といるのだから。

更に拍車をかける用に5年ほど立った頃この家に肝試しに来た学生二人がその晩

行方不明なり、消息をたった。それから多くの若者が肝試しに入り

それらは帰って来なかった。そんな家の中に今日は友達三人と入ることになっている。

若気の至りとも言つのか、不思議なものに興味を持った子供が

興味心のまま突っ走ると言うか、とにかく愚か極まりない行為だ。

しかし、おそらく、必ず、彼らは翠真抜きでも肝試しを決行するだろう。

今は夏、夕暮れでもわずかに暑苦しく、何より学生の遊びたいさかりの季節。

さらに言えば、男一人と女二人それだけなら放置しても構わないがその一人の男が監視しなければならぬ存在だった。

二人の女は幼馴染で昔からよく口を交わす仲、そしてもう一人の男は

高校に入って二人にやたら好意を寄せる危険極まりないド変態。

武に精通する者としてそのような危険な存在と屋根の下を潜らせるわけにはいかない。

「はあーあ、眠いな。さつさと帰るか、下調べもすんだことだし」
翠真は体を反転させ、廃墟を背にしたまま水辺から路上へ復帰しそのまま歩道を歩く。

翠真は大きな佇まいの屋敷の門を一步地面を蹴って抜ける。

無数の高級感漂う砂利の置かれた庭を抜け、巨大な屋敷の中へ足を踏み入ると

靴を脱ぎ、綺麗に揃え、光沢を放つ木の板を踏みしめて目的の部屋まで

歩み寄る。麩の前に立つと扉を開き、中へと入った。

同時に座り込む老人から声上がる。

「スイマ翠真あらゆる武術を極めしお前に今日も挑戦者だ、

相手をしてやれ」

「私に挑戦者…… ですか。一年前からやたらと増えましたね」

「ああ、お前がすべての武を極めたからな。今思えば地獄のような特訓の日々じゃった」

白髪の老人に似た様相の父が長いあごひげを撫でながら自分の事のように

そついう、父はすべての武術を身につけるために全世界をわたり、そして

常人の域を超えた領域まで踏み込んだ達人に並び称されるほどの男。

そんな、最強の称号を得た父だったが、翠真は齡16の頃そんな父をも超えた。

あらゆる武術を極め、あらゆる達人と死闘を繰り広げ幾度も死線をくぐり抜けてきた若き武の化身。

それが天下無双流継承者、龍翠・翠真。

「父上がまるで地獄を経験したようないようです…… 実際は私が死ぬ気でこなした修行なのに」

「そりゃーそうじゃろ？ ワシの特訓装置の実験台はワシ自身だったのじゃからな

まあーとにかく、道場にお前の相手が待っておられる。天下無双流の力見せてやれ」

笑いながら父はそついう。その光景はまるで孫とおじいさんのような光景に傍目から見れば

見えるだろうが、目の前にいるシワの無数にある老人はれっきとした父である。

46歳の頃23歳の女性と恋に落ち結婚、子作りに励み、47歳でスイマを授かりる

そして育てた。だからこそ今現在64歳という高齢者、それでも武の力は

世界で二番目と称されるほどの力を秘めている。化物のような老人だ。

翠真はそんな父に背を見せ、両目にかかる黒髪を風に揺らせながら道場へと足を進めた。

最強と言う名の称号を授かって一年、数多くの武術家と戦いそして勝利してきた。今日もそれは変わらない。

道場の扉を開き、中へと入る。

中には全身から気を放つ黒髪の男の後ろ姿がありそれを見据えて声を上げた。

「私の挑戦者とはあなたですか？」

甲高い声が小さな背の男からほとばしり漏れる。

「クカカカ、そうだ、あんたの最強の称号、俺が頂きに参った。さあ、尋常に勝負勝負」

男は忍者服のような様相をしており猫のように素早く、体を翻しクナイを突如翠真に頼った。

それを体を僅かに動かし避ける。

同時に背後の袂に数本のクナイが突き刺さる音が漏れると、ずきんで口元を隠した男の顔が翠真の視界に写り込んだ。

片手には鎖鎌を回転させ攻撃の構えをとっている。

「俺のクナイを避けるとは、だてに最強を名乗っているわけではないな」

「別に私は最強を名乗っているわけでも自慢したいわけでもないんですけどね

周りが勝手にそう言っているだけです。特に父上が耳にタコができるほど

毎朝毎晩言ってきますから、自分としてはこんな称号ゴミ箱に捨ててやりたいですよ

ほんと」

そう言いながら翠真はため息を吐くと、男に対して微笑を浮かべた。

「けれど、最強という称号はそう安んずてられないモノなんですよね…… 本当に

面倒な称号を頂いたものですよ。ハハハ」

「ならば、俺にその称号を献上しろ！」

その声と共に男は足を加速させ、鎖鎌を回転させて頼ってくる。

「そうしたいのは山々なんです、それはできないんですよ。

負けてしまえば私は父上と戦わないとならない。

父上との戦いはどんな訓練よりも修練よりも辛いくツイものですから

そんなことするくらいなら貴方に勝利して風呂に入って床につくほうが

いいじゃないですか？ですからすみません。今日は他にも予定が入っているのです

じゃれあっている暇はないんです。一瞬で終わらせます」

男の頬てくる鎌を僅かな気道を読んで避け、男の懷に加速し、そして拳に込めた力を腕の筋力を利用して男の腹に叩きつけた。同時に男はうめき声と共に空中へ吹き飛び、天井にめり込み、数秒後落下。

たたきつけられる音と共に男は白目を向いて倒れこんだ。

それを見据えながら男の状態を確認する。

「肋が数本折れてるだけか、うん、これならまあー相当痛いだろうけど

路上に出しといていいかな。一応救急車も呼んどくか」

翠真は携帯を取り出し、救急車を呼ぶと、男を家の前の門に横たわらせ

そのまま救急車の来るを待つて事情を説明した。

「本当に毎晩毎晩私たちの仕事増やさない出くださいよ……一日一人重軽傷者を出されては
いくら病室があつたてきりがありません」

それに一礼しながら翠真は答える。

「すみません、次は怪我のないように気絶させます」
「いや……まあとにかくお願いしますよ」

そう言つて救急隊の人は車に乗り込み、サイレンを鳴らしながら家を去つていた。

それから4時間と立った月明かりの眩しい暗闇の訪れた頃。
翠真は欠伸をしつつ、無数に広がる砂利と月の光を反射する川の
音を

耳にいれながら一軒のボロ屋の前に立っていた。

チェックの入った黒色の服を身に纏い黒色のジーパンを身につけて
メロンパンをかじりながら前に佇む三人の男女に声を上げる。

「あのさあー本当に入る気？」

「もちろん！ だって夏よ？ 夏って言えば恋と祭りと肝試しじゃない！」

二年生最後の夏休みフィーバーしなくちゃ」

短髪で活発な明るい声音の口にする京子、

幼馴染で一軒隣の家に住む高級住宅街の住人である。

容姿は美人というよりも可愛らしいという方が的確で実際に

そんな彼女の人柄や可愛らしいところを好きになって告白する

学生が多くいるという。それらはすべて撃沈で終わっているとか、

それに、長い髪ので艶やかな髪を持ち主が言う。

「確かにそうだけど……なんでよりもよってここなの……
私怖いよ……」

怯えるようにその声を上げたのは水嶋^{みずしま}・美月^{みづき}

真向かいの大きな屋敷に住まう、海外に無数の油田を私有する

日本で最も財ある家系のお嬢様。容姿は白く透き通るような肌と

女優のように整った顔つきの誰もが認める美少女。しかし性格は

おとなしめで、好き好んで人と話そうとしない。心の友と呼べる
のは

朝木・京子ぐらいだろう。

「大丈夫さ！ この大明寺・秋雨が付いている限り、美月様は私が守ります」

煙たい声を上げたのは、問題の男、だいまいようじあきさめ大明寺秋雨
逆玉を狙うしがない工場長のひとり息子である。

茶髪で耳を覆い隠したくせ毛の目立つ世で言うチャラ男に数えられる男

どういうわけか、神はこの男に女たらしの美男子という才能を与えたいらしい。

「秋雨くん？ 何をやってるのかな？」

「何って？」

「その手よ、その手、さっきから美月の背中を触ってるその手！」

「ああ、いやね、怖がってるから少し励まそうと思って」

そんな秋雨に京子の背負い投げが送られ、秋雨は
背を抑えながらゲホゲホと息を吐いた。

「京子、前よりも完成度上がったんじゃないの？」

翠真が綺麗に決まった背負い投げをした京子に対してそう言うのと、

「ええ、背負い投げなら黒帯にも引けを取らないって柔道の先生に言われたわ」

「へえーすごいね。僕にも今度教えてよ」

「いいわよ。でも翠真にできるかな……？」

「うんー多分難しいと思うけど頑張るよ」

「そっか」

京子の猫のような可愛らしい笑を見ると翠真も微笑を浮かべる。学校での彼は運動能力ゼロ、体育の成績はいつもドベ、学問優秀万年眠そうな顔している怠け者として認知されていた。

そもそもうちに入ってくる柄の悪いひとたちの事は父上が相手をして毎晩送り返しているということになっている。なにより、誰も同級生の中には翠真が武術に長けていることを知らないのだ。

翠真自身、それをばらす気も自慢する気もない。学校こそが平穩に暮らせる唯一のやすらぎの場所だから。

「ははは、レディーの投技なんて男の私には効きません」

背を抑えながら苦笑いを浮かべる秋雨に対して京子が小馬鹿にするような視線を送る。

それに秋雨は思わず顔を背け振り返り、そして声を上げた。

「も、目的を忘れちゃいかんよな、そうだよ。そうだとも。私たちの目的は

この屋敷の謎の解明じゃないか！ よし、翠真！ 共に謎を解明しようじゃないか」

「あれ……今日は肝試しに来たんじゃないんだっけ？ いつから謎解きになった？」

すると、突如、秋雨が翠真の首元を腕で拘束し耳元で焦るような意地の悪い声を口にする。

「とにかくだ、肝試しも謎解きでもどっちでもいいが、とにかく俺を彼女ら二人のどちらかと

二人つきりにしろ！ いいな？俺にとって正直こんな場所には興味はない。

俺の興味はもともと京子ちゃんと美月ちゃんだだけだ。とにかく俺に協力しろ！」

それに翠真は即答する。

「断る！お前を大切な幼馴染と二人つきりにするわけないだろ？」

「何……お前、俺とお前との友情を捨てるというのか？ゴミみたいにポイって

ポイ……」

「友情？いつのまに私とお前との間でそんな友情が生まれたのだ？」

「私って……お前なんか今日変だぞ？そこは僕だろうが！てか俺とお前との間に

友情は成立していなかったというのか？」

「まあーそうなるな。とにかく私は君の邪魔を全力でするつもりだ」
「何……」

呆然とする秋雨を他所に京子が突然声を上げた。

「そろそろ時間だよ。二人が行かないなら私達だけでいくよ？」

それに美月が両手を手に添えて頷く。

「秋雨、二人も呼んでることだし我々も行こう」

「あ……分かったよ」

それからすぐに彼女らの背後につき廃墟へと足を踏み入れた。

廃墟の中には無数の埃が蔓延し、喉を突くような息苦しさがある。足場には無数の瓦礫が点在し、畳は腐っていたるかしこに穴が開いている。

四人は四人ともライトを片手にその空間を照らす。

天井には無数の蜘蛛の巣がかかり壁には子供の落書きのようなものが映り込む。

そこで異様な部屋に四人は足を踏み入れる事となった。それは問題の部屋。

長女と次女の部屋。

「何も……無い」

「なんか、この部屋怖いです……」

京子と美月の声が漏れると、翠真も口に出して言う。

「本当に何も無い、瓦礫すら。一体どうなってるんだ？」

四人の見た物は何も無い綺麗な白い部屋だった。

廃墟というのにこの空間だけは埃一つ、瓦礫一つないのだ。

「ねえ……そろそろ12時よ、やっぱり帰らない？」

「なんだかこの部屋変よ！ 掃除もしてないのにゴミひとつないなんてありえないわ」

喉のふるえる声で京子が言うと、気落ちしていた秋雨が声を上げ

る。

「確かに気味の悪い部屋ですね。まるで誰かが毎晩掃除でもしているようだ」

「ああ、この部屋は綺麗過ぎる」

「ねえー帰りましようよ。早くしないと本当に12時になってしまいますよ？」

京子ちゃんの言うとおり、早く……」

美月は顔をこわばらせ、京子の手を握りながらそういう。それに翠真が言う。

「そうだね、帰ろう」

「それが正しい選択かもしれない。今度肝試しするならほかな幽霊スポットにしよう。ここはリアルにやばそうだ。噂によれば深夜の12時にカルガギとか、サルガベシソ捕まえたとか言ったら異次元や異世界に消えるって話だからな。とにかく早くここから出よう」

「バカ！」

京子の声が空間に轟いた瞬間、どこからか時計の鐘の音が鳴り響きそして突如、白色の部屋が青色の電流を放ち始め、そして……

「な、何だ！」

「え？ え？ エエエエー」

それは何が起こったのかわからなかった。

一瞬眩しい光に包まれたと思えば、視界に突然大きな石が無数に点在する

遺跡のような場所を捉えたのだ。

足元には巨大な絵のかかれた岩があり、先ほどの廃墟とは全く別の空間にいるのだ

空には青々と雲が太陽が存在し、岩の先には平原が広がっている。

「なんなのこれ？ 夢？ じゃ……ないみたいね」

「おっきな平原ー」

「どこじゃーここわー！」

「……？」

それぞれが声を出し、一步また一步と足元の円の広がる場所から離れ

京子と美月そこに翠真がそこから降りた瞬間、再び円の描かれた石が輝き出し、そして光の中に秋雨だけが取り残され光と共に姿を消した。

同時に入れ違うように無数の青白い服を着た中世の兵士のような様相をした

男たちがその石の上に現れ、そして……

「不法侵入者だ！ 拘束しろ！」

「は！」

それと同時に数人の男たちが空中に青色の円を作り出し何かを口にする

それが光り輝き、同時に翠真を含める三人を泡の風船のような物が包み込み

そして耐えられないほどの睡魔に襲われ翠真は意識を失った。

ブローグ（後書き）

今回は予想以上字数がふくれあがってしまいました。分割も考えたのですが

やはりブローグは一発で、と思い6000字にも及ぶものとなりました。

長文申し訳ない。

1話：牢獄と写真

薄暗く湿った空気が漂う空間の鉄格子の向こう側、周囲を石の埋めこまれた壁で囲まれ

蝋燭の火が薄気味の悪い空気空間を作り、鉄格子の先に住む者を包み込んでいた。

「翠真、ここどこだかわかる？」

凍てつく寒い空気の漂う牢の中で暖かな声音が反響し翠真の耳に入ると

翠真はそれを首を左右に振って言う。

「わからない……だが、一つだけ言えることがある」

「言えること？」

「それは……別の」

そこで言葉は京子に遮られ、

「いや、その先は言わなくてもわかるわ……私だって小説や漫画でこういう

世界の事は知ってるもの……」

片手を翠真の前に押し出し停止するかのようにそう言った彼女に
続き、

美月が正座しながら蝋燭の光に集まった蝶や虫の姿を眺め
面白そうにゆっくりとした柔らかな口調で言葉を口にする。

「はぁー蝶蝶はいいわよねえ、自由に空を飛べて、私も蝶々になり

たい……」

「何言つての……？ 美月」

憧れるような若い少女の瞳で蠟燭の方を見る少女に対して京子が心配げに

声を上げる、それに美月は我に返ったように京子の方を見て学校で見せる

微笑ましい男女瞬殺女神スマイルを浮かべた。

ある者が言った、彼女の笑には女神の微笑を感じたと
大人しい性格でお嬢様、そしてなによりすべての者の心を射止め
てしまう

女神スマイル備え持つ彼女に一度微笑を浮かべられるとあらゆる
男女が心を奪われ抜け殻のようになってしまふという。

実際に翠真のクラスでは彼女の笑みを禍々と見てしまった生徒が
一日中保健室で頬を赤らめて口を開いたまま石のように固まっ
ているのを

何度が目撃したことがあった。

しかしそんな彼女の微笑でも撃沈されない存在がいる。
彼女への免疫を持っている存在、それが翠真と京子だった。

「こら！ 今は天然系を装わなくていいの！ だから私らの会話に
混ざりさなさい！」

「ええ」

その言葉を聞いて京子が拳に息を吐きかけ、獲物を射るような目
で美月を見据えて

再び問うように言う。

「それ以上抵抗するって言うなら私も……」

「分かったわよ……普通の私に戻ります。だからアレだけはやめてよ……」

前に受けた時はオデコが赤くなっちゃったんだから」

「何言ってるのよ……ただのデコピンじゃない」

「ただのデコピンでも痛いの変わりないんだから、私は痛いのが嫌いな」

美月は額を数度撫でながら柔らかな細い目で京子を見据える。

それに京子がため息混じりに言う。

「まあとにかく、本題に入りましょう。まずはじめにここがどこでどんな場所なのか」

「牢には間違いないと思うけど、それがわかったところでどうするき？」

脱獄でもするの？」

翠真は彼女らにそう言った。

実際、鉄格子を破るのは翠真にとって造作も無いことだった。

鉄を砕け、と父上に言われ三日三晩鉄と格闘し、そして鉄をも砕くすべを得とくしたのだ。何よりあらゆる武術を極めている

翠真にとって鉄格子などボロ屋の脆い腐った木の板のようなもの軽く手を下せばやすやすと突破できる。

だが、その先が問題だった。

兵力は1000人いるのか1000人いるのか、はたまた10000人いるのか

しかし、数はそれほど問題ではない。おそらくそれらは対処でき

る。

だが、この世界にやってきたその時、突如放たれた異能力それが厄介だ、どういう力があるのか、何種類あるのか、未知の力を使う

相手にどう戦えばいいのかわからない。

それに彼女ら二人の身を守りながらとなると、脱出はかなりの困難になると翠真は考えていた。

「脱走ってそんなことできるわけじゃない？ 武器も何もなくてあんな

得体のしれない人たちにどう戦うっていうの？ そんなことよりもここは

女の誘惑で……」

京子が赤色のブラウスのボタンを外しそれほど魅惑的とも思えぬ小さな胸を

わずかにさらけ出し、大人のポーズを取りながら鉄格子の向こう側にいる

男に対して誘うような手招きを送る。

「看守さん……私……」

「おい、やめろって……」

翠真が頬を僅かに赤らめ、片手で目を覆い隠すかのようにしてもう片方の

手で京子を止める。しかしその手を払いさらに彼女は続けた。

「ねえー私を見て……ほら、ほら」

それに監視一瞬目を向ける。腰には無数の鍵がゆらゆらと揺れ、かけられている。

しかし、監視は京子の体を見た途端に鼻で笑い再び視線をテーブルに戻す。

それを見た京子が突然涙目になって、崩れ落ち、子供のように泣きが始めた。

「な、何よ……私の体が全然女として見えないって言うの……そうなのね

絶対そうよ、だからあの男は鼻で笑ったのよ！悔しさよりも悲しさが勝って
くう……」

するとそこで、突如看守から声が上がった。

「おおお！」

「え？」

美月の気の抜けた声上がり、続くように京子の啞然とする声と共に翠真はその光景を見て啞然とする。

「京子、あのさ……なんて言うか……ショック受けるなよ？」

美月には生まれながらの人を釘付けにするような才能があるんだよ多分、それは並の才能じゃなくて、本当に生まれながらの才能だからさ

京子が傷つくことはないよ……」

「フオローになってないんですけ……」

「まあーとにかく落ち込む……」

「無理よ」

「それでも落ち込むなよ」

「無理ったら無理！」

「なら……杭がなくなるくらいまで落ち込めばいい」

「そうする！」

二人の会話が飛び交いつている最中、美月は白色の肌を豊満に育った果実のような胸胸を両手で抱え、先ほどの京子と同じような姿勢をとって

看守にアピールしていた。それを見た男は目を白色に変え、舌を出し、其場に盛った猿のように不抜けた顔をして美月を見据えている。

「あのさー今思っただけで、監視なんて誘惑しても何も得られないんじゃないかな？」

さらに言えば脱走を考えてないならなおさら監視を落とす意味がないのでは？」

よくよく考えてみれば、そうだ、監視など落としたところで何も話は進展しない、もっと偉い、地位のあるものでなければ意味が無いのだ。

「あ……そう言われればそうね。って事は私達無駄に体をさらけ出したってこと？」

ああ……なんか存した気分」

「え？ そうなの？ 結構楽しいのにこれ」

「こら！ もうイイから服をちゃんと着なさい！」

「はい」

美月と京子の二人が服をちゃんと着込んだ頃、突如上へと続いている階段の方から

無数の足音音が漏れ出ると、しばらくして数人の男たちが現れ、牢の前に立つと

一枚の紙を手に取りそれと中にいる二人の女を見比べるようにして見ると、

紙を持っていた男がつぶやくようにして声を上げた。

「先ほど、抱きかかえられている姿を見てもしやと思いましたが…
…間違いない

行方不明中のお嬢様です！」

「そうでしたか……者共、早くこの小汚い牢獄からお嬢様を出して差し上げなさい」

「はっ！」

すると、牢の扉が開かれ、美月と京子の前で男は足を止め二人の前に跪き、

固く重い口調で男が言葉を漏らす。

「ロイネ・ニア・アルディース様、この度の部下のご無礼お許し頂きたい。

されど、なぜ、無許可で移動石をご使用されたのですか？ あなたほどの

地位があれば移動石の許可など糸を切るほど容易く得られるでしょうに」

美月と京子は互いに目をあわせ首をかしげつつ言う。

「あのお嬢様ってどなたのことですか？」

それに男は京子の目を見据えて言う。

「もちろんあなた様です」

「え？ 私はそんな名前じゃ……」

そう答えるも、後押しするように牢屋の外に立っていた男が一枚の紙を

京子の前に差し出し見せる。

京子はそれを見るやいなや驚くように声を上げた。

「写真……それも私にそっくりな……」

「はい、間違いなくあなた様です」

「本当だー京子が写真に写ってる」

覗き込むようにして美月がそう言つと、男は口を開く。

「そう言えば、あなたが方は何者なのですか？ ロイネ嬢の使用人か何かですか？」

「使用人？ 私は使用人じゃなくて友達ですけど、それにロイ……」

そこで口をふさぐようにして京子が美月の口を抑えると、京子が翠真を見据えて

頷いた。

「僕も彼女とは友達です」

「そうでしたか、では我々と共に来てください。あなた方にも御無礼を働き

申し訳なく思っております」

どうやら、この場所にいる翠真を含める3人以外は全員が京子をロイネという女性と

勘違いしているようだ。

これは利用できる。翠真はそう思った。
彼女らもそう思っているだろう。

この牢獄から抜け出すことができるのだから。

彼らの話からしてロイネという人物がかなりの位のお嬢様のようなのだ。

ココから連れだされてもひどい扱いを受けることはないだろう。
なにより、写真を見た限り、京子の容姿とロイネというお嬢様は
双子のようによく似ている。表面的にはばれる事はないだろう。
内面的なモノはやはりなんとかごまかすしかない。

どうであれ、今はロイネという人物になりすますほか道はない。
京子もそれはよくわかっていているはずだ。

なにより、美月の口を封じたのがその証拠、今は彼らの後をついていき、

時を伺うのが上策。それにあの写真のことも気になる。

翠真はそう思いつつ立ち上がり牢を出ると、

男たちの後を京子や美月と共に追った。

1話：牢獄と写真（後書き）

今日は後二度ほど更新いたします。

2話を20:00、3話を21:00

2話：豪邸にて

囚われていた牢獄より反日と馬車を北へ走らせた距離の頃。

日差しは沈み、街町に灯火がわずかに輝き自らの存在を尊重する姿を素通りし一門の前にて馬車は停止した。

同時に馬の唸るような声が静けさに沈む暗闇の彼方へと消え去り。息を荒げる馬の手綱を御者が引きながら馬車を開かれた門の中へと進め

大きく豪華な佇まいをした屋敷の扉も前まで歩きその足を止めた。

「お嬢様、並びにそのご友人方、到着致しました」

馬車の扉を開き、片手を胸に当てつつ執事のような黒く正装した白髪混じりの老人が馬車の横手につき、しわがれ声を口にする。

それに体を伸ばしあくび混じりに馬車から出る京子と美月。

翠真もその後を続くようにして馬車から降りた。

すると牢屋で写真を持っていた老人が手を一度鳴らすと馬車は屋敷の裏手へと

車輪の石を蹴る音と共に消えていった。

それを翠真は見据えつつ周囲に目を向ける。

辺りには無数の石畳が点在し、すぐ前には階段と屋敷が佇んでい

る。

その屋敷へと続く数段の階段を執事のような形なりの老人は

一歩また一歩と進み、両手を中央に合わせながら進み

光沢を放つ趣きのある木製の大きな2つの押し扉の前で止まると

京子の目を見据えて、優しげな、それでいて懐かしむような優しい目で

その渴いた唇を開いた。

「ロイネお嬢様、おかえりなさいません。我々執事一同、メイド一同は

貴方様の帰りをどれだけお待ち申していたか、何よりも

ロイネお嬢様のお元氣そうなお顔を見て嬉しゅう思います」

「え、ええ……」

老人の信じきった眼が京子の胸を痛めたのか京子はどこか申し訳なさそうな、それでいて罪悪感にさいなまれているような表情を浮かべ

それを隠そうと作り笑いを浮かべている。

そこで、翠真の耳元で美月が耳うつ用にして言葉を発した。

声と共に彼女の生ぬるい暖かな息が耳元をかすめ、花のような甘い匂いが香ってくる。

「ねえー翠真君、面白いと思わない？ あの京子の申し訳なさそうな顔。

やっぱり悪いことすると、人って心に抱いてるものを表情に体の仕草に出すもの

なのね、プッフ」

「面白くはないでしょう……京子は素直な子だからさ、多分執事の事とかこの屋敷の人たちの事とかいろいろな人の心中を察して

多分、今一番苦しいと思うよ？ これって笑えないでしょう？ やっぱりさ」

それにわずかに微笑を浮かべていた美月が頷き
そっか、と口にすると落ち込むようにして自分を反省させ
黙りこんだ。

それを翠真は優しげなそれでいて柔らかな眼で見据え
彼女の髪を赤子のように優しく撫でた。

すると彼女は野良猫のように翠真の表情を伺い、見据えると
わずかに微笑を浮かべ、京子のとなりへと歩み寄って行った。
そして耳元で何かつぶやくと、京子の暗い表情がわずかに緩む。

そのすぐ後、目の前にある扉が木のしなる音と共に開き、中から
光が漏れる。

目の保養になる黄金色の光、蠟燭の煌びやかな暖かな陽光を思わ
せるその光に

溶けこむかのようによく合う、赤色の絨毯が地面にはしかれ
扉の先には二階へと続く階段が堂々たる気品を漂わせながら存在し
それは中央で2つに別れ左と右へ道を作る。左右には花の形をか
たどった

手すりが伸び、来客者を思わず見とれさせる設計となっていた。

なにより翠真を驚かせたのは、通路に並ぶメイドや執事服を纏う
者たちの

京子を見た途端に見せた一斉のお辞儀、メイド喫茶が子供の遊び
ごに思える

ほどの人を魅了する何か力のあるお辞儀だった。

同時に言葉が上がる。

「おかえりなさいませ、ロイネお嬢様」
「た、ただいま……」

その言葉に50人近くの二列にならぶメイドたちが微笑みを浮かべる。

「それではまず、お召し物」

「え、私はこのままで……」

「行けません、これより旦那様と奥方様の面前に出向くのですからお嬢様らしく気品のある服で出向くべきです」

京子は自らの姿を見据えブラウスの服を見て頷く。

「分かりました。貴方のいうようにします」

「そうですか。ではお連れの方もお召変えをお願いしてもよろしいですか？ いささかその格好では食事の時

旦那様や奥方様の目に触れますゆえ」

「分かりました。私はそれでもかまいません。どんな服を借りられるのか

楽しみだし、翠真君も同じ意見でしょ？」

「ええ、まあ」

「それでは客間にて客人二人はお待ちくださいますよう

お願いいたします。後にメイドのを数人出向かせますので、その時にお着替えを

ではまず、ロイネお嬢様は私について来てください。これから旦那様と奥方様に

合われる準備を」

すると、京子は顔を曇らせ、不安げに翠真に視線を向けてくる。それを翠真は大丈夫だ、と頷き答えた。

それからまもなくのこと、京子は執事に連れられ上の階へ翠真と美月は下の階段の裏手にある部屋へと通された。

部屋の中は長椅子が2つと多いな騎士のような絵が描かれたかけ墊がかかり部屋の後部には庭を映し出すガラスの窓がある。部屋は学校の部室程度の広さがあり、左右には二本ずつ系4本の蠟燭が立てかけられ輝いている。

しかし、その他には何もなく、質素な空間だと翠真は感じた。そのまま美月の腰を下ろす長椅子に向い合って置かれている椅子に腰を預け、対面し口を開く。

「京子のやつ大丈夫かな？ いつも気を張り詰めて男に負けんと部活とか喧嘩とか頑張っちゃう性格してるだろ？ 本当は気が弱くて、泣き虫で怖がりで、気持ちとは正反対の事をするからさ、今頃不安でダンゴムシみたいに丸まってるぞきつと」

それに美月が黄金色に輝く蠟燭の明かりを反射する柔らかな唇を僅かに動かし、片手を頬に乗せて優しげな声を漏らした。

「優しいね……翠真は。見てないようで人の心とか気持ちとか性格とか、全部見抜いてる。考えてないようでいつも人のことを考えて

考えて、考えぬいて、それでもまた考えて……自分のためじゃないくて

いつも人のために、本当の自分を隠して、みんなを幸せにしようとしてる

そんな翠真だから私は……」

「どうした？ 突然」

こつ恥ずかしいセリフを長々と語った美月はどこかつるな目で翠真の黒色の目を見据え、そして微笑んだ。

「いや、何でもないの、何でも……とにかく大丈夫よ

京子は弱いけど、強い女の子だもの」

「そうだな……」

それから数分と立った頃、部屋の扉が開かれ、数人のメイドが様々な衣装をうでにして、入り込んできた。

その中の最も豊満な丸々とした腹を持つメガネをかけた白頭巾をする30代半ばのメイドが声を上げる。

「それでは、お召変えを行います」

「ああ、そこに置いといてください、自分でやりますので」

翠真がそう言うと、そのメイドは首を左右に振りそれを拒絶する。

「なりません、我々の仕事はお客様のお召変えをお手伝いすることですので、心をお決めになられよ」

「いや……その、断る！」

「え？　ここで着替えるの？　だって隣には翠真が……」

「大丈夫、殿方がおられる空間でも我々が壁となりお嬢様のお肌をお守りいたします」

「え、そんな……きやああああ」

「やめてください……やめ……」

二人の悲鳴に似た声が部屋に反響し、夜の空へと消えた。

3 話：不安の心

純白の柔らかなベット上に少女は横たわるようにして倒れ、戦意を失った兵のようにうなだれた。

「私……もう無理です。私の純情は数分前に脆くも崩れてしまいました」

お母様……」

黄金色に近い髪をベットに押し付けながら顔を何度か数分前のことを

否定するかに柔らかなベットにこすりつける京子。

ベットは真新しい陽光を浴びた布団のような暖かな良い香りが香り胸に渦巻く靄を僅かに和らがせる、がそれごとくではこの嫌な感じは

治まらない。なにより、腹と腰を圧迫する豪華絢爛なるこの赤色のドレスが憎らしゅうてたまらない。

京子は赤色に無数の刺繍を施された煌びやかなドレスを身に纏い耳にピアスと、両手に白色の柔らかな手触りの手袋をつけ背を高く、足を細く見せる踵の高い赤色のハイヒール履いてベットに埋まっていた。

それはすべて数分前のメイドの襲撃によって素っ裸にされ取り付けられた品々ばかり。

体を翻し、京子は天井を見据えてつぶやいた。

「お母様が昔言ってたっけ……ドレスは女の鎧、男の心を射ぬくための

戦衣装だと、で、私は誰の心を射抜けと言うの？」

そこでちらりと脳裏に一人の締りのない顔の男がよぎる。

しかしそれを見て、左右に首を振ってかき消した。

「あいつは私の弟みたいなヤツよ？　なんであいつの顔が出てくるのよ。」

それに怠け者みたいにあいつは弱いんだから……」

自分に言い聞かせるようにして京子はつぶやいた。

京子の理想の男は自分よりも強く、誰をも守れる立派で優しくて頼りになる、そんな男、先ほど彼女の脳裏に浮かんだ男に当てはまるのは優しいところだけ、それでは明らかに守備範囲の域を出ていない。

そこで、あの執事の声が扉の先から漏れ、京子は開かれた扉の先を見捨てて

慌てて大の字に寝ていたらしない格好を正し、股を閉ざした。僅かに頬をりんご色に染め上げ、顔に熱が伝わる。

「ロイネお嬢様、旦那様と奥方様がお待ちです。私の後についてきてください」

それに京子は慌てて頷き、ベットから降りようとした。

「あれ……うあー！」

足がもつれ、ベットのシーツを足に巻きつけ地面に無造作に倒れてしまう。

慌てて体制を起こそうともがいてみると、老人が喉を鳴らし急ぐように促す。

それを見上げて京子は再び顔に熱がほとばしる。

数秒の格闘の後、ようやくシーツから抜け出ると、パタパタと服を叩き、立ち上がる。

「えへへ」

笑ってごまかそうとする京子に執事は言葉を交わす。

「シーツの方はメイドたちに申しておきます。戻る頃には元通りになっっているでしょう」

「お手数かけてすみません……」

「ロイネお嬢様が謝られることはございません、我々の仕事は主に従い、仕事をこなすことなので、では、旦那様と奥方様のお部屋へご案内いたします」

通路をすすむ度すすむ度、メイドたちが頭を下げて通路に立ち京子がすぎると

仕事にとりかかる、そんな光景を目にしつつ、大きな扉の前で執事は止まり

二度のノックをすると、萎れた花の如く、細く弱々しい皺のよる手の平で

扉をゆっくりと開いた。

扉の先から風が抜け、暖かな空気が京子の全身に吹き抜ける。

執事は一例し中へ入り、声を上げた。

「旦那様、奥方様、ロイネお嬢様をお連れしました」

執事の視線の先には窓際のほとりにある無数の彫り物がされたテーブルに

膝を乗せ片手にマグカップを手にした初老の白髪と黄金色の髪が入り交じった男と青色の

長く伸びた優しい微笑を浮かべる婦人が一人椅子に腰を預け座っている。

二人の左右にはメイドが両手を中央に合わせ目を閉じたまま立ち尽くしている。

京子は開かれたままの扉の前で立ち尽くしそれらの光景を呆然と眺めていた。

そこで男から声上がる。

「何をしておるか？ 我が娘よ」

力のある暖かな声がそう耳にはいる。

見るからに優しそうな男、中年太りしているが纏っている空気や醸し出している空気が暖かく、居心地の良い物に京子は思えた。

しかし、京子の父は目の前にいる男ではない。

目の前の男は京子の事をロイネという少女と思っているようだが、京子はロイネではない。

その事が、重く、苦しく、京子の胸にのしかかる。

「ロイネ、よく戻って来ました。一年もの間、心配しましたよ？」

続くようにして男の横に柔らかな笑を浮かべている優しい人な人が声を上げた。

見るからに優しそうな夫婦だ、そんな二人を騙すのはひどく心を痛めた。

今ここですべてをさらけ出したいとも思った。

けれど、それは自分一人で決めていい話じゃない。

ここには少なくとも翠真や美月がいる。

自分勝手なことはできない。

京子は重い足取りで二人の前にたち、ゆっくりとした言葉を口にした。

「ただいま戻りました」

「うむ」

「よく戻りましたね。母は嬉しいですよ？」

「戻ってそうそう、悪いが、あの時のことは覚えておろうな？」

「あの時の事……て？」

「忘れたのか？ 婚儀のことぞ」

「婚儀？」

「そうだ、お前がこの家を飛び出した理由だろうに？ それをも忘れたのか？」

「あ、いえ……」

京子がこの家の事を知っているわけもなく、話にあわせるような形で

前の夫婦に口を合わせる。

「あの時は悪いことをしたと本当に反省している。だから婚儀の事はもういい、お前の好きなように好きな男と恋愛をするがいい。それが

お前の幸せにつながるのならそれでワシらは十分だ」

「ありがとうございます……私の事を思っ下さり、本当に……」

親が勝手に決めた結婚など、誰が認めるものか、親の都合で結婚させられる

者にとってそれは嫌いな物を無理やり自己満足で押し付ける最低な行為だ。

だからこそ、逃げ出したロイネと言う自分によく似た少女に対して好感が持てた。

京子がうつむいたまましばらくの時間が過ぎた頃、女が急かすように男の手を握り

男がそれに背を押されるようにして口を開く。

「ロイネ……結婚相手の男なのだが……明後日家で開かれる舞踏会に来ることになっておる

のじゃが……そこで式を逃げ出した事や好意がないことを自分の口で言つて欲しいのだ。

そうでなければあの男はお前の事を諦めぬ」

「わ、分かりました」

「頼むぞ、はあーすつきりした。今宵わ豪華にお前の友をもてなそうぞ」

「そうね、大切な娘の友たちですもの」

「うむ」

それからしばらくの後、豪華な料理の並ぶテーブルで翠真たちと共に

食を済ませ、そして翠真と美月は客室の部屋へ、京子はロイネの部屋で眠る事となった。

幅の広いベットの上で京子はポツリと呟いた。

「やっぱり、私が謝らなくちゃならないのよね……何をどう謝るの？
私はあなたには興味がありません、とでも言う？ それとも
私にはもう好きな人がいるんです。とでも？ ああーわかんない
わかんないよ」

頭をひどくかき回しながら京子はそのとくに付いた。

4話：つきまとう男

夜の帳が星々を包み、ほの暗い暗闇を作り大地を覆っている中
ティデール王国、第三都市エデリオンの貴族街に誇大な敷地と
豪華絢爛なる佇まいの屋敷のテラスから翠真は吹き抜ける夜風を
全身

に浴びつつも茶の軍服に似た様相で空を見上げていた。

空に広がるは、無数の煌く星々と地球で見る月に似た姿の丸く大
きな

母星が浮かんでいる。

この世界に来て2日、屋敷の人々にこの世界の様々な情報を聞き
出すことができた。

さらに豊富な数の書物がこの屋敷には管理されており、それらの
資料を物色することによって

歴史、文化、文字など、多種多様なことを学習することができた。
文字に関しては書けはしないが、読むことは可能で、今思えば
今の今までこの世界の人々と会話が成立し言葉を交わしているこ
とから

何かしらの作用が三人の身に起こったと考えられる。それはこの
世界に来る前、

三人が共通して体験したこと、そしてこの世界に来ることになっ
た原因。

それらの要因をふまえ考えた場合、思い当たるフシはあの意味不
明な言葉

なんの規則性も意味のある言葉とも思えぬ『カルガギ・ザルカベ
シソ』と

言う2つの言葉、なんの意味があるのかそれはわからないままだ
が、その

手がかりは掴んでいる。この二日間で書庫の本を物色していく内にこの世界ではカメラや写真といった人を『映し出すもの』は存在しない

事ががわかった。つまり執事が持っていたあの写真は这个世界ではありえぬ

技術によつて残されたものだという事、何より執事からその写真について聞くことができた。

名前はアルヴァルス・クレイガー王国軍第三騎兵隊隊長。

その男がこの屋敷に一年ほど前、ロイネが逃亡する前に隊長に就任したことを

伝えるべくやってきたという。この屋敷の主人、ロイネの父はこの国の軍隊に

通じる役職についている国の重鎮であり、挨拶に来るのはごくごく当然の事。

その時、ロイネに一目惚れし、数枚の写真を常日頃持ち歩いているという

インスタントカメラと呼ばれる物でロイネを撮影し

その時に取られたのがあの写真だと、そして今日、その男がこの屋敷へやって来る。

昨日の昼間、京子にロイネの分かった事を聞かされその時に説明された

ロイネと婚約を約束していた男がそのアルヴァルス・クレイガーだった。

「アルヴァルス・クレイガー様、ご到着になりました」

翠真はその声に体を翻し声の上がった方向へ目を向けた。

暗闇の広がる空から一転、煌びやかなドレスを纏う淑女たちと互いに言葉を交わす紳士たち、白色のテーブルに並ぶ

税の限りを尽くした豪華な料理の並ぶ会場が翠真の視界に飛び込んでくる。

しかし、翠真はそれらには目もくれず扉の先から歩み出てくる一人の男を見据えて近づいていく。

自然とその足取りは早足になっており、間もなく男の前に到達した。

だが、翠真よりも先に男と言葉を交わしている者がいた。

「あの……一年前のことは申し訳なく思っています。ですが。私は他に好きな方ができたのです……」

申し訳なさそうに謝るよく聞きなれた声、京子の声。

京子は水単色の長い三段のフリルの付いたドレスを空に揺らせながら

手を体の中央に重ね頭を下げながらそう口にする。

それに茶色の額に無数の切られたような傷跡のある

薄茶色の胸に無数の勲章のような物がかかる軍服を着た男が髪の上に掻き上げながら

わずかに微笑し、口元を動かした。

「そうですか。では余計に貴方を私の者にしたくなりました。

私は昔から恋の壁が高ければ高いほど燃える質でして

必ずやあなたの心、奪ってみせますよ」

男の目にはなんの迷いも同様もなく、真っ直ぐな瞳で京子を見据えてそういった。

それに、京子が困ったような表情を浮かべ、周囲を見渡し翠真を見つけるやいなや

腕を捕まれ、男の前に出されると、京子はとんでもないことを言い出した。

「わ、私の好きな方はこの方なんです。私はこの方が好きで好きでどうしようもなく

好きなんです。だから貴方に私の心はゆるぎません」

強い口調で、焼けになっているかのように彼女はそういう。

それに翠真は動揺し、不拔けた顔で男の顔を伺った。

男は微笑を浮かべながら鞆に手をかけ、懷からハンカチを丸めて翠真の胸元に頼った。

それを翠真は拾い、手に取る。

すると、周りから突然野次馬たちの声が漏れ始めた。

「おい……決闘をあのお男受けたぞ？　しかも相手はあのクレイガーだ」

「軍隊の方つてどうしてこもう決闘が好きなのかしら？　私どもにはとんと理解できませんわ」

「死ななければいいがな……あの若者」

「わからないわよ？　決闘と言えば真剣での真っ向勝負ですもの相手があのクレイガー様ならもしかすると……」

淑女たちが皆同じように扇で口元を隠しつつそう小言を言い紳士たちは哀れみの視線を翠真に送って来る。

「あのさあ……京子、お前のせいで、なんか面倒なことに巻き込まれちゃったよ？」

なんか物騒な話周りの方々はしてるようだし、逃げていいですか

「？」

翠真はそう京子耳元でつぶやくと、京子は受けなさいつと言わんばかりの

目で翠真を見据えてくる。

「決闘は一度受けたら両者のどちらかが負けを認めるか死に至るまで続けなければならない事になっている事はロイネ嬢の恋人である坊ちゃんにもわかつているはず、ここは潔く剣を取り私と対峙なされるが

懸命だと思うが、どうか？」

何か嫉妬の念を感じるその重々しいそれでいて道化のような子供を相手にするような

ちやちな声音を吐く男に翠真ため息と共にその言葉に頷いた。

「本当に私と決闘をするんですか？ 私は多分貴方に勝ってしまえますよ？」

「ずいぶんと自分の武を信じているようだな？ だがそれは所詮は習い事

程度の武、我々武人には通用しませんよ？」

「武人ですか……確かに貴方は武人のようだ。鍛えあげられた肉体美使い古された腰にかかる剣、幾千もの戦いをくぐり抜けたことを証明する

頬の傷、そして他者に対する敵対心、確かに武人だ、しかし貴方が武人ならば私は武神です」

「武の神にもひとしき力を坊ちゃんが持っている？」

翠真はそれに何の迷いもなく頷く。

「ほほーならばその力見せてもらいましょうか坊ちゃま」

「構いませんが、決闘と言つと、なにか得るものが必要だと思いませんか？」

「得るもの？　ならば私は坊ちゃんが彼女と別れる事を望むかどうか？」

「構いませんよ。では次は私、私が求めているものは情報です」

それに男は眉を尖らせ、射るような目で翠真を見据えて言う。

「それはつまり、軍の情報は欲しいということか？　それなら……」

男の言葉に首を左右に振り、続けるようにして口を動かす。

「私の求めている情報はこの国のことでも軍のことでもありません
貴方の持つているインスタントカメラなる存在の事についてです」

その言葉に周囲の紳士淑女が首をかしげて皆同じような小言を口にする。

「インスタントカメラ？　初めて聞く名前ですわ？　貴方はご存知？」

「いえ、私も存じません。一体なんなのでしょうが？」

その言葉を聞いて、男は獣のような目で翠真に言う。

「そんな情報手に入れてどうする？」

「今は私には必要な情報なんですよ」

「ふん、まあいい。どうせアレの事は話したところでどうしようもないだろうから」

話してもいい。それでは、互いに商品は決まった。決闘は庭で執

り行おう。

血でこの屋敷を汚すのは忍びないからね」

翠真はそれに頷く。

それら二人の会話を耳にしていた京子が翠真の耳元で耳うつようにして優しげな、それでいて不安に満ちる声音を漏らした。

「翠真……大丈夫なの？　そもそもアレは何？　私は武神とか武とは何かを悟ってるどこかの達人みたいな事言ってたけどそんな嘘すぐにバレるわよ？　戦えばすぐに」

彼女は知らない、翠真が武の高みへ上り詰めた最強を名乗る武術家だと言うことを、

翠真は彼女に眠気を誘う微笑を浮かべ、つぶやいた。

「僕は大丈夫だから、心配しなくていいよ。あの程度の武人なら物の数分で終わる」

「え？」

そう言うと、全身から存在とい気配を消し去り空気のように闇のように

音もなく、存在することを認知すらできない程に静かにそして跡形もなく

気配を消した。

おそらく、この会場で彼の姿を捉えることができるものはいないだろう。

歩いているのにそう見えない、存在しているの意識の外へ除外され無いものとされる

完全に気配を消した翠真は消した。

5話：インスタントカメラと男

翠真は歩き、テラスを抜け、下にある庭に飛び降りると、広く見通しのいい

芝生のしかれた場所へ立った。

前には剣を構え、前を見る男の姿。

しかし男は翠真の姿を捉えていないのか辺りを見渡している。

翠真は自ら気配を再び放出し、その存在を男に感知させる。

男の目には突然暗闇から振って湧いたように翠真が見えただろう。実際に男の体がわずかに後ろへひるんだ。

「坊ちゃん、ずいぶんと気配を消すのに長けているようだが、気配だけをうまく消せたとしても積み重ねてきたこの拳と剣にはかないわしない。この決闘、剣を用いての戦い坊ちゃんに勝機はないと思え」

そう言う男は腰にかけていた二本の剣のうち、緑色の鞘をした剣を

翠真に頼る。それを翠真は受け取り手に取り抜き取った。

月光の光がわずかに剣の刀身を輝かせ光を反射させる。

男も同じく剣を抜き構えの体制を取る。

男の全身から殺気が溢れ出し、煮えたぎる鍋の水のように空間を覆っていく

翠真は表情ひとつ変えずにそれを見据えて宙に剣を踊らせ、風を

切る音が

漏れ出ると、小さくつぶやいた。

「刀背打ちがいいですか？ それとも切られる方がいいですか？」

「坊ちゃんのくせに俺に手加減をするとか？ ナメるな！」

男のいきり立つ声が静けさに包まれた庭園に反響するのを耳にして

翠真は剣を構え、向かってくる男に対して低く腰を落とし身構える。

「覚悟！！！！」

男の怒声が響くと同時に男の握られた剣が光を反射し翠真の体に向けて

振り下ろされた。同時に翠真はそれを見切り、更に下へと体を下げ

背を風を切る音と共に抜けた剣が過ぎ、同時に翠真は片手に握る鞘を

男の顎に勢い良く叩きつけ、上へと飛ばす。

男の体は宙を回転しながら舞い、数秒空を漂うと、地面へと落下する。

その道中、翠真の剣が男の体を切り裂き、男は剣の振られた右へと勢い良く

飛んでいった。

それはわずか、数秒間で起こった恐ろしく早く、素早い攻撃だった。

数秒間、何が起こったのかわからないまま沈黙が過ぎ、数分と立

った頃

ようやく翠真が勝利したことをテラスから見上げていた者たちが知り

換気の声が上がった。

翠真は軽く息を吐くと男の前に歩み寄り、片手でそれを持ち上げて屋敷の使用人に男を伝言と共に渡し、そのまま屋敷の寝泊まりをしている

個室へとその姿を消した。

その翌日、一台の馬車が屋敷の中で止まり馬車から降りてきた男が客前へ通された。

翠真はそんな彼を見据えながら客間の長椅子に座り、左右に京子と美月を置いて男に座るように促す。

男の顔は昨夜の決闘で腫れ上がっており、腹をかばうようにして席へとつく。

「では昨晚の決闘の商品としてインスタントカメラの事について話してもらいましょうか」

「そう急かすではない、話すさ、その前に……」

男は京子の方を見て言葉を続けた。

「私も男です、あなたの彼氏はこの私と対等にやり合い、そして勝ちました。」

これほど強い男があなたの夫になるのなら私は、貴方から身を引きましょう」

「本当ですか？ よかった……」

胸をなでおろすかのように京子が言うと、風邪声の美月が声を上げる。

「コホ、コホコホ、よかったね……コホ」
「うん」

咳混じりにそう言う美月を見て、男が眼の色を変えたように美月の手を取り目を見据えて、胸踊るような声を上げた。

「一目見た時から貴方の事が好きになりました！　どうか私とお付き合いを！」

それに美月が暗く蔑んだ目で見据え、即答した。

「貴方は私の趣味ではありません。丁重にお断りいたします」

それを聞く男は首を振り、

「私は諦めませんよ！　きっと貴方の心を射止めて見せます！」

この男、必ず将来、女がらみで死ぬ、もしくは殺される。そう翠真は思った。

そう思わされたのは彼女らの醸しだす殺気と綺麗な女を見れば全てに

一目惚れしそうな性格の男を見た結果がそう告げているからだ。

「諦めの悪い男は嫌われますよ？　おたふく顔のお兄さん」

美月がそう口にすると、男は首を傾げる。

なぜかそれで微笑を浮かべ、さらにつよく美月の手を握る。

昨夜の彼の凛々しく整った顔つきの面影はみじんもなく腫れ上がった頬がおたふくのように今の彼は見える。

「おたふくでもなんでも私はあなたを幸せに……」

「フッフ、私の奴隷になるなら考えてあげなくもないわよ？　コホ

……」

「美月！　変なこと言わないの！　女王様の気があると思われるわよ？」

「だって、この人犬みたいなんだもん」

「犬ってあんた……」

「美月、落ち着けてこんなところでSプレイはご法度だぞ」

美月は落ち込むかのようにして方をすくめ、ため息を履く。

これ以上目の前の男に場をかき回されたくない。そう思い翠真は本題を切り出すことにした。

「クレイガーさん、単刀直入に言います。インスタントカメラはどこで

どうやって手に入れたんですか？」

それに男は、

「ああ、そっぴーそっぴーという話だったな。えっと……」

男は腰にある無数の革袋の中から何かを手にとるとテーブルの上に載せた。

それは茶の色をしたカメラ。

それを見て美月と京子が声を上げる。

「どこかで見たことあるような……」

「うん、確かにこれ見たことあるよ？ でもどこでだっけ……」

二人が唸るようにして言うと、男が口を開く。

「うんーこのインスタントカメラに出会ったのは10年くらい前になるかな

まだ新米だった歩兵の頃、ボロ布を纏った男に出会ってね、その男に

剣と食べ物譲る代わりにもらったんだよ。名前も顔ももう覚えちゃあーいないがな」

「10年前にもらった……そうですか、その男と何か話しましたか？」

「うんー特に何も話してないな、ああ、そういえば妙なこと言ってたな」

「妙なこと？」

「ああ、世界がどうか、俺のいるべき世界じゃないとか訳の解らん言葉を何度もいつてたよ」

その言葉に三人は顔を見合わせ頷く。

「多分その人私たちと同じようにこの世界にやってきた人多分」

「つてことは私達の他にもこの世界にはこの世界の住人じゃない人が暮らしてるって事？」

「そうなるだろうね、このカメラだって明らかに僕らのいた世界の物だから

多分少なからずそういった人はいると思う。この世界から元の世界に戻る

方法も見つかるかもしれないし。僕らは旅をする必要があるかもしれないね

京子はともかく僕と美月はこれ以上この家にやつかいになるわけにはいかないし」

「うん」

彼女ら二人が頷くと、男が再び口を開く。

「そう言えば、その男は魔法に関することを調べているとも言ってたよ

だから俺は魔法で有名な国オルガリオンの事を話したんだ。

その男の探してるならそこへ行ってみるといい。いなくても

面白いものが見られるぞ」

「オルガリオン……確かここから南に1ヶ月ほどかかる距離にある国ですよね？」

「ああ、徒歩だとそうなるが、移動石を使えば2日とかからず到着するだろう

で、俺の話すことはすべて話した。他に質問がなければ俺は帰るぞ？」

「ああ、もうありません。今日はありがとうございました」

「決闘での儀を通したまでのこと、ではまたいずれお会いすることもあるでしょう

では」

そう言つと男は部屋を足早に出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255y/>

魔法と剣のある異世界物語

2011年11月23日19時13分発行